

第115回 記者懇談会実施概要

- 1 日時 2017年3月15日(水) 15:30~17:30
- 2 場所 関西大学梅田キャンパス 4階 KANDAI Me RISEラボ (多目的室)
- 3 内容

(1) 研究発表・質疑応答 (15:30~16:30)

- ・吉田 宗弘 化学生命工学部教授
発表テーマ「日本人と昆布とヨウ素」
- ・小川 博司 社会学部教授、三浦 文夫 社会学部教授
発表テーマ「ポピュラー音楽アーカイブ構築と音楽メディア研究プログラム」

(2) 学内状況説明・情報交換 (16:30~17:30)

- ① 2017年度入学試験志願者・合格者状況について 資料1
- ② 高臨場感環境 (ハイレゾ立体音響、4K/8K映像) 遠隔配信
及びパッケージ化に関する実証実験プロジェクトについて 資料2
- ③ ライティング支援ソフトウェア「TEC-system」について 資料3
- ④ 2017年度客員教授の委嘱について 資料4
- ⑤ 2016年度卒業式、大学院学位記授与式および
2017年度入学式の挙行について 資料5
- ⑥ 外国語学部DDプログラムについて 資料6
- ⑦ 2017年度社会安全学部東京連続セミナーの開催について 資料7
- ⑧ 地域連携事例集の発行について 資料8
- ⑨ 米国・UCLA Extension提携オンライン講座の開講について 資料9
- ⑩ 奨学生会「葦の葉倶楽部」について 資料10
- ⑪ 「関西大学体育振興大島鎌吉スポーツ文化賞」授与式の開催について 資料11
- ⑫ 関大生の活躍について 資料12

4 大学側出席者

芝井敬司学長、良永康平副学長、高作正博学長補佐、
吉田宗弘化学生命工学部教授、小川博司社会学部教授、三浦文夫社会学部教授、
小林至道教育推進部特別任命助教、大塚進入試広報グループ長、
荒堀善文エクステンション・リードセンター事務グループ長、松並久典総合企画室長、
立仙和彦総合企画室次長、依藤康正広報課長、宮武明生学長課長 他

5 参考資料

- (1) 関西大学通信 第457号
- (2) 関西大学ニューズレター「Reed」第48号
- (3) KU-SMART PROJECT News Letter No. 1
- (4) 2017年度第43期(43年目) 飛鳥史学文学講座 パンフレット
- (5) 校友会ホームカミングデー「2017スプリングフェスティバル」チラシ
- (6) 行事予定表(3月~4月)

以上

【次回(第116回)記者懇談会開催予定】

日時: 2017年5月17日(水) 15:00~17:00
場所: 梅田キャンパス

日本人と昆布とヨウ素

関西大学化学生命工学部栄養化学研究室

吉田宗弘

栄養学では、炭素、酸素、水素、窒素以外で、①生命維持に必須の生体分子またはプロセスに関わり、②摂取不足の場合に健康障害（欠乏症）が生じ、③適量の摂取によって欠乏症を予防・治療できる、という3条件を満たす元素を「ミネラル」としている。ヒトでは、ナトリウム、カリウム、カルシウム、マグネシウム、リン、塩素、イオウ、鉄、亜鉛、銅、マンガン、ヨウ素、セレン、クロム、モリブデン、コバルトの16種がこの条件に合う。これらの中で、鉄以下の9元素は生体内存在量や必要量がとくに少ないため「微量ミネラル」としている。私は長年にわたって、微量ミネラルの生理機能、食品中含量、摂取量推定、必要量策定などに関わる研究に従事してきた。ここでは、微量ミネラルの中で、日本人特有の問題がある「ヨウ素」に焦点をあてる。

ヨウ素は甲状腺ホルモンに含まれており、摂取不足は甲状腺機能低下を招く。一方、過剰のヨウ素は、甲状腺ホルモンの合成と甲状腺へのヨウ素輸送を阻害するため、欠乏時と同様の甲状腺機能低下を招く。ヨウ素は海藻類をはじめとする海産物に多く含まれるため、これらの摂取が少ない食習慣では欠乏することが多く、現在でも数億人規模での欠乏症が認められる。しかし、特異的に高濃度のヨウ素を含む昆布を食する日本人は世界でも稀な高ヨウ素摂取の集団であり、欠乏症ではなく過剰摂取のリスクを考える必要がある。

日本の食事摂取基準では、昆布摂取を考慮し、健康障害を起こさないヨウ素摂取の上限量を欧米よりも高い3 mg/日としている。昆布は、乾燥物で数 mg/g、だしの形態で数 mg/100 mL のヨウ素を含む。食事摂取基準では数値の達成を毎食ごとに求めているが、昆布を食材として使用すれば上限量を超えるため、献立から昆布を排除するケースが出現している。また、海外では、ヨウ素を理由にして昆布を使用した食品が市場から追放されることもある。特殊な事例を除けば、日本人において昆布を原因とするヨウ素過剰障害は認められないことから、現在の日本人の昆布摂取に問題があるとは考えられない。日本人に昆布に起因するヨウ素過剰障害が生じない理由として、①ヨウ素摂取が間欠的である、②昆布中のヨウ素の吸収率が低い、③同時に摂取する食材がヨウ素の吸収を妨げている、などが考えられ、現在、これらを立証するための研究を継続している。昆布を食材として安全に利用するための条件を明らかにすることで、食事摂取基準の数値などを改定し、昆布に着せられた濡れ衣を晴らすことになればと考えている。

プロフィール：

1981年京都大学大学院農学研究科博士後期課程指導認定、関西医科大学公衆衛生学教室助手、専任講師、助教授を経て、1998年から関西大学に勤務。農学博士、医学博士。現在、化学生命工学部教授、副学長。大学院生時代から一貫してセレンをはじめとする微量ミネラルの栄養学的研究に従事しており、最近では、栄養素の必要量や摂取の推奨量などを示す厚生労働省の食事摂取基準の策定ワーキンググループ、食品添加物としての栄養成分の安全な使用範囲を定める食品安全委員会の専門部会専門委員など、食品・栄養行政への関与が多い。チョウを用いた環境評価など、昆虫に関わる研究でも若干の業績があるほか、教育面では、栄養や公衆衛生に関する専門科目に加えて、食や環境に関する教養科目も複数担当している。

ポピュラー音楽アーカイブ構築と音楽メディア研究プログラム

関西大学社会学部メディア専攻教授 小川博司・三浦文夫

[概要]

小川は、ノリという言葉が 1980 年代以降、盛んに使われるようになったことに着目し、ノリの構造モデルを作り、日本のポピュラー音楽史をノリの学習過程として捉え、ノリと社会変動との関連を社会的に追究している。

三浦は、「メディアプラットフォーム」をテーマとし、放送のネット配信の先駆けである **radiko** を発展させ、放送と連動した音楽関連サービス、マス広告（ブランディング）とネット広告（レスポンス）双方の特徴を持つオーディオアドについて技術、音楽権利処理、ビジネスモデルの視点から考察している。さらに、地域社会の安心安全、経済の活性化に繋がる日本型プラットフォームのあり方についても研究している。

小川・三浦が中心となり、2014 年から関西大学日本ポピュラー音楽アーカイブ・ミュージアムプロジェクトをスタートさせた。「音楽アーカイブ」については映像のデジタル化に力を入れ、70 年代初頭から 80 年代のスタジオライブなどを中心に約 7500 本のアーカイブを既に構築している。さらに、未来の高臨場感アーカイブ構築に向けて、高速の学術ネットワークを利用した 4K、8K、ハイレゾ立体音響の伝送と蓄積の研究を行っている。社会学部カリキュラムにおいて、音楽メディア研究プログラムを設け、「音楽を学べる社会学部」であることをアピールし、鋭い感性をもった熱心な学生が入学してきている。

[プロフィール]

小川博司 1952 年生まれ。埼玉大学教養学部卒業。東京大学大学院社会学研究科（新聞学専攻）修士課程修了。桃山学院大学を経て、1996 年本学に着任。専門はメディア文化研究、音楽社会学。日本ポピュラー音楽学会の設立メンバーであり、現在 3 期目の会長を務めている。主な著書に『音楽する社会』（1988 年、勁草書房）、『メディア時代の音楽と社会』（1993 年、音楽之友社）、『メディア時代の広告と音楽』（共著、2005 年、新曜社）など。

三浦文夫 1980 年慶應義塾大学経済学部卒業、電通を経て 2012 年より現職。radiko を考案、実用化。音楽アーカイブ構築、ハイレゾ立体音響の配信などを手がける。アーティストコモンズ実証連絡会幹事、スペースシャワーネットワーク社外取締役、radiko フェロー、関西大学音楽アーカイブ・ミュージアムプロジェクト代表、サイバー関西プロジェクト幹事、マルチスクリーン型放送研究会顧問、元民放連ラジオ再価値化研究グループ座長、民放連シェアラジオ推進部会特別委員、民放連ハイブリッド型ラジオ研究部会特別委員。著書『インターネット世界への扉』（1995 年マガジンハウス）、『デジタルコンテンツ革命』（1996 年日本経済新聞社）、『少女時代と日本の音楽生態系』（2012 年日経プレミアシリーズ）。